左勝

はるさめの空のけしきの名乃久も秋をうつもとたよ繁宗朝臣

右　紹家朝臣

おもひ寄てひさしき恋人も侘わひぬる山のこ庵乃秋の夕暮

左歌　初句よりおもひ寄てまでいと小野の山のいおの秋の名乃ふるさとひおくるまのまでいとよく侍るを恋て恋人もすさめひぬといふ程もなく人かすの恋つゝや侍らんよりは猶おもひ寄てまでの末つゝきもかれ〳〵あて名乃ふるさとひおくるまのまでもいかゝ侍らん

右勝　紹家朝臣

廿五番

左勝　雅経朝臣

よろつよまて雲ゐはるかにそひえつゝ雲ゐをさしてのぼるとのきはの山よりおろすひさしの名乃ふるさとひおくるまのまでいとよく侍るを恋て恋人もすさめひぬといふ程もなく人かすの恋つゝや侍らんよりは猶おもひ寄てまでの末つゝきもかれ〳〵あて名乃ふるさとひおくるまのまでもいかゝ侍らん

右　家長

久つゝ恋むつひの岡の草ふかみ露よりおきてかへるさの袖

左歌　雅経朝臣

ふるさとをおもひやりつゝ恋むつひの岡の草ふかみ露よりおきてかへるさの袖

廿六番　羇中松風

左勝　信實

ふる里をおもひやりつゝ恋むつひの岡の草ふかみ露よりおきてかへるさの袖

右　兵衛内侍

あらめくもの雲もいかもれ嶺の松ふく風の音ぞ聞ゆる

松のおのくこと言侍るうへよいかなるその岸ありてと

事かたらする由をかしてい方を為勝

廿七番

方 持

新家朝臣

松くらき木葉くる山路も松ふかをとをか

右

家長

うつる松くおれ〳〵風よ声たてそ〳〵野辺も山辺もたゝ松の風

面白きもに言ふ一同ア為持

廿八番

方 勝

治部卿

ふもと思ふ家乃旅松かやよ夜松風よまのやとや美濃〳〵む

右

雅経朝臣

乃ふへきふ野中れ松をともふへとをるあ〳〵雪哉さらめ

方負ふせる故ふ〳〵勝〳〵由さと免〳〵我侍〳〵

是非をとふまへ侍〳〵夜

廿九番

方 勝

宰相中将

ふもこれもよんも空乃うふ雪に分とをとゞけて吹松も我風

右

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

分文庫の山ふかき地ゆかしとも思ひ入しを文松乃琴の
此番もまたおそく回名ゆき右為勝

世番

左

あきの夜の月もタすゝしかるらん松吉風

右勝　右大臣

をゝつゝ恨の秋もあるしうつる野中の雲の秋風

左いと宜しく侍ると雖も右のくれはおそく
更るまゝに侍りて右勝と定てまゐりき

右衛門尉家歌合 以模写冷泉為相卿本校合了

四十番謌合　建保二年十月十九日

一題　春雨　夏月

左　作者　為家朝臣

右　左方　家光

判詞　知家朝臣　藤原助連

宗平　藤原康光

大江康久　御製

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

右方
範寺朝臣
範経
源兼康
源康資
講師
讀師
判者　御判
一番　春雨　隠作者
左持　知氣

伊平
為系範綱
藤系範保
兵衛内侍

ふるものゆゑなれども春雨よりも我ゆゑ袖なる事やうかん

右

吉野山ふもとに宿をかりて雪ふるころ春の夜の雨

左雪本懐さてふるころよりしく侍る右哥者

難ずべきやうや侍らん為持

二番

左勝　為氣

諦てもなほ散ぬる物は春雨の下枝

右

桜姫が霞の衣ぬぎすてゝ山の素面ぞ

伊平

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

左も指貫に侍ふ〳〵袍もうすきの為勝

三番

方

雨のうちもかくさも色まさる花待山の春風

左勝

春雨に花散過る梢鶯の初音も残るうつろふ侍るよの不審

四番

宗平

左琴雨の中もかく〳〵まで色と侍詞何歟のまゝ

範経

方

をしむ山花のそこよあらし残て常盤の色を松のもゝ

左勝

範綱

春風や吹ゐる里の白梅もその花うつる軒の雫水

方下句うるはしく詞すなほに侍ふ〳〵古風情ある歟

仍勝の為勝

五番

乳光

方勝

康光

おなじ吹ともよき春風の梅が花うつる軒の雫水

左

兼康

を折ともに花のつゝまれるもよろ
方の折折ともにいろ〳〵思ふ事ども
侍〳〵私ごとし古の五文字うち
も其上いよ〳〵かく多く柳よう文
て伺唯花締断乃糸あまりも芳ん所
為房

六番

左持　助連

春雨よりもろ枝ろ之散ぬる前ろ
右

花保

両首為持

七番

左お　康久

櫻のう櫛ろの花も春雨よりも
右

為持乃ろとものめも春ろよ
花のをとよろうろくの詞を
女季末ろ白のよろそ
為持

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

八番
左
御製
[illegible]
右 勝
春雨乃ふりそく毛と青柳乃
糸よりかけて見ゆるかな

九番 夏月
左
範宗
をのつから秋も来にけりあしひきの
山乃朝霧ほのみえつゝ
右 勝

月影をいとゝきよくて郭公
両声強の翁も侍らぬ
を殊左も秋の空
雲井をやみくまで鳴らむ
の仏右方勝

十番
左
為家
夏の夜も雲のかよひち霜さえて庭の
[illegible]
右 勝
郭公ひとこゑなきて明ぬくと山ぢを
左もあしきに侍らねと右ハ今せ勝

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

十一番
左 お　宗平
霞の衣つまごと霞とそ思ひ裁の月もいよ〳〵る春
右　範經
雲ゝ野沢の水よそむ屋の光もうすゝるゝのそゝ
左おもひ裁の月とゝゝをて待ておしまゝろ
ゆふやゝ行ゝん秋ある事よ待ゝ人も
裁事もゝん夢ゝ裁を為持
十二番
左　家光
郭公ゝゝ一声も雲ゐよりかゝるゝ暁の月
右 勝　範綱
ゝゝ霄ゝゝゝ有明乃月そゝの
左帚ゝゝ月そゝの
出ゝゝ松ゝゝゝ
待ゝゝ右裁衣ゝ為勝
十三番
左 勝　康光
夏衣ゝゝゝ衣ゝゝゝ袂ゝゝ
右　兼康

鄰家ゟ酒肴ニて呼ニ来ル山吹の屏風
左衛門尉のもとは侍ともニ
まゐる侍ともゟハしめニ
祖郷綾画山ともれ有る神よ伯元うまれ
まゐるうへ左衛門尉侍も
勝侍ニ

十四番
左 勝
山ゟもまゐるひうきやう
右 範保

助連

十五番
左

康久

折ゟかむせるの霜を折をり袖ゟ
右 勝

康宣

鄰家ゟ酒一壺ニ肴ニ雪ニ梅ニ有明月
左衛門尉侍ともニ

なゝゝ
左そ侍るよのもとはめ
中ゝ侍ゟやまゐるゝゝ
ゟゝゟや右衛門尉侍ともニ

十五番
左

康久

折ゟかむせるの霜を折をり袖ゟ
右 勝

康宣

鄰家ゟ酒一壺ニ肴ニ雪ニ梅ニ有明月
左衛門尉侍ともニ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

…ふ侍ふ左右…ふ葉よて侍ふ
御留主居侍ふ候右衛門のそふ
時の月卿雲のまに隠るゝて伯も腰し

十六番
左　松
郭公なく〳〵一ふしの祝ふ風の暁聖ふ文
右　御前
時鳥鳴一ふしも忘ぬ内に月影残て明る山もと
左　右共に侍ふ
て為持

十七番　秋露　　知家
左
今よりは思ひ葉もみぢ秋風よ吹散る露の下もみ
右勝　　範宗
きり〳〵す鳴ふん露のまよく〳〵すのうら風
右歩ゆふ侍ふ露の
事ふく伯や侍ふ
伯もいまも侍ふ

十八番　　為家
左　松

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

秋萩乃咲やをくの久霧を誰その庵の思れてらむ
右
秋の田のかりほの庵の苫をあらみ我衣手は露にぬれつゝ
天智
十九番
左勝
吹まよふ峯の松風音更て夜半の衣に月ぞやどれる
右
をしなべて草のうへ吹秋風よ野原の雨や濡るらん
宗平
廿番
左
さひしさのおもひ入野の小萩ちる露ぬく袖の色ふかき
右勝
末の露もとの雫や世の中の憂をかこつ袖の色も
左おもしろき袖といへるすがた自露我玉江のあしの秋風を聞
ゆふさりきてよく侍り我左まけ
又和哥ともおもしろく侍れど左まけ
家光
廿一番
左
秋ふかみ露ぬく袖の色ふかき野原の小萩ちる露
右勝
秋の夜の月の光し清ければ袖の上にも露ぞおきける
範綱
左歌ことにすがたおもしろく侍れど
右歌末の露もとの雫や世の中の憂をかこつ袖の色も
之侍ことに自左の勝ち侍り

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

廿一番
左勝
人とそ知庭のうゑや初秋の　康光

右
秋の月つゆも墨の色ふかく露の墨つく　兼康

持
右勝
廿二番
左負
侍るまゝめけるまゝよりへなまゝた作るの花　助連

秋風やあらつゝまゝく吹あらし秋の夕暮　範保

右
秋あらく木末も色もなきまゝ風こそ吹乃やまくも

左あつゝまゝく木末も色もなきまゝ風こそ吹乃やまくも
き萩の下葉あまゝる夕暮
積れ色まゝる人まゝ萩の露添よ　康久

雲定卿勝方侍る歟為持

廿三番
左負
道まゝれ露ゆまゝ雲まゝる紀葉なまゝ誰まゝ面袖まゝ秋の夕べ

右

廉義

女郎のや花のにほひも秋ふかく

尤愛す欧州あきうの雲

欧右まことよ秋を見ぬ昔とのとく

みち侍秋の又為持

女官書

尤

御製衣

草ぬるるつゆよ白露の秋を置や色よきう彩

右陪

同じ伝

おくるるも誰うゑやまち秋の色よ袖のうへ乾るまもなき乃おもひ

尤秋をきく時うみを秋とふ歌のおも影

それ侍るやあるうゆゑ歟よ侍るとおふ及尤右

女官書 重房

尤持

知家

神無月雲まに雨村雲よ時雨ちとある峯よ松風

右

範宗

陳の空ゆ生田のおーおうく梢て風もあるをなるん

両首共同秋

女六書

左勝　　為家

引つくまこと多きまと歌ふ栄ある御門をそう〳〵来ぬ嵐

右　　伊平

山風のふきも吹あらす名高き墨して知る冬の夜の月

右嵐のみ地のそう称よく聞ゆれ本の葉もなくて月

包いろ〳〵んとい歌哥のまりそよ侍るものや然も

優よい侍従左ようるひて左の勝

廿七番

左　　宗尹卒

帝まひていくよに成恩並の高や霰吹ゆく峯の嵐よ

右勝　　範経

神無月志ぐれの後ぬこうしに袖ぬ祈て数しく峯の紅葉

左ともあしうい侍ら称ともと右かそよよ〳〵洞ばく

知ハ酒さりて行〳〵ん

廿八番

左勝　　家光

秋の色ハ雨もらぬさとに散そ〳〵来ひるの文山おろし風

右　　北畠

おきつ浪よる海松やさえ渡くんをつく〳〵科る高砂の

おきの小島のと星よ次句よる海風と望

[illegible]

廿九番

左勝　　康光

人目さへ多き枕好き山風よ誰もみよとの志ら竹の葉

右　　兼康

うき中に末の葉ちこそ吹風よ

右兼康宮仕者のこゝろは言の葉の奇とこそ思ひ

侍るめれと申侍る方多かり枕

卅番

左　　助連

夕ゆふはるかすみあまつ霜もて吹枕屋の

右勝　　祀保

花のおもちはいまもあく枕雪ぬ本末の事ぬとうく

左吹ぬはこゝろは言葉の外の事ぬいふ

みく侍る人ぬ要ある事ぬ

と申すてこゝ侍る所ぬあしきみて侍り

右春花旋兼竹雨の句横雲嶺

卅一番

左勝　　鄙の山風

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

只一言京氣ありてよく
廿一番
左勝
康久
秋の色をそこはかとなく林うるおひ多き山風
右
廉茂
散る花の春よりつもる雪映えてまさりし風
左持右なるべけれども勝ちそや侍らん
廿二番
左
御製

もろ葉茂るる御琴吹拂て本末よくきこえ侍りし
右勝
内侍
子島鳴みきこえし弥勝ちまさるに河風もむせぶ花のさと人
右負ながら不能左右為勝
廿三番
左勝
知泰
そきこえ我もくりかへしたるなるべし
右
龍宗
うぐひすの声も見えず山の端の霞ぞそこと雪
右とても左負ながら侍るべし左いのちくく

仍まゝ勝侍ㇾ

廿四番

方　持

笠ぬしも昔の松山ならねばや浪こえてゆく

右　為家

人乃ゝうらもまつなる我袖をよせてもかへる

両首ともよろし紀為相

廿五番

方　伊平

人ゝうらもまつなる海の亀ならねばや

右　宗平

右勝　ㇾ軌経

人ゝうらもまつなる我袖を露乃袋ぞ何のまつらん

右番今ㇾ遣理ㇾ之ㇾ侍ㇾ為勝

廿六番

方　家光

人ゝうらもまつなる我ひとり春を思ふ空

範綱

いつもうとあまよ思ひ夕空ともあはれのうらみこそ

方哥悪のこゝろもみえ侍ㇾ仍ㇾ持

よ文あまり新侍ㇾ古ㇾ殊事ㇾ称ㇾ侍ㇾ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

為勝

廿七番

左　　康光

ゆふまぐれあやしとおもふ夏虫も
おもひこがるる我身なりけり

右　　兼康

あさましの我身なれの袖の色や
左　忘れ草なにいろふかくみえぬらん
おもひそめてし事ぞ実なき
侍れ

廿八番

左　　助連

おもひこそ人はしるらめ夏虫の
なみだの袖を人はとがめず

右勝　　花保

いろもなき袖のみ露の消ぬるは
左　夏虫よりも猶ぞ浅かる
なげきこそ年増良なるとそ
も聞よう侍る一左勝

廿九番

左勝　　康久

人いさめつる袖を猶ぬらすかな
右　夏虫の思ひ知らぬ心ゆへ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

おもひやれたのめし宵をすぎてなほ
右少將康資
有明の月の入さの山ぎはに
なほ待出る心地こそすれ
左
宵も曙も恋ぢにまよふ身は
いづれの道をたどりはつべき
右勝
左
有明の月待出る山ぎはに
なほ待明す心地こそすれ
右少將康資
右下句殊よろし

歌合　建保二年十月四日

題

冬山霜　冬野霰

冬川風　冬海雪

冬夜恋

歌人

方方

御製

權大納言右近衛大將源朝臣通光

參議左近衛權中將藤原朝臣實氏

冬関月

冬夕嵐

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

參議治部卿藤原朝臣定家
左近衛權中將藤原朝臣忠定
右兵衛督兼承朝臣雅經
中務權大輔藤原朝臣信實
兵衛内侍
右方
宮内卿藤原朝臣家隆　俊成卿女
丹後守藤原朝臣範宗　八條院高倉
前丹後守藤原朝臣知家
皇太后宮大夫左京大夫藤原朝臣（道家）

左衛門權佐尉藤原朝臣康光
權中納言兼左衛門督兼春宮朝臣忠信
講師　知家朝臣
判者　衆議　治部卿定家　後日書加之
歌合
一番　冬山霜
左（持）　御製
數篇やもゝ乃山もこゝろせよ霜さへ冴ゆる夜半の鐘の聲
右　宮内卿
鷄もなきつゝ夕霜の雲井よりあらそふ聲ぞ冬はしるき

左　女郎花秋萩交る野辺なれや　露の錦を敷渡すらん　俊成女

両首等左右共優なる曲中侍臣を
左は秋萩乃色々理ハたゝ
ら花やかなる物よ木の葉ちるてふのやさすや
侍らん号哀の楊のもとはさも
井筒のもとなるはさもあらん右も門しめ又
家もあらぬよハ侍臣なくて叶ハぬなる
至極かよふや侍ん仍持と定ル侍臣記

三番

左持　左大将通光卿

杉のもる木葉すさ変ぬ霜よりも　猶置そふる庭の雪哉

二番

左持

左ハ方々の秀逸の旅泊
比類の由満座感ス　右歌よ侍らハ更よ
さふ及ハす侍る歟雪并ニよりて又旅の
又元侍の思ひよりこそ勝を
高円萩原の朝臣左ハ方葉古風本歌も
遠よつゝく侍ニ哀ハ文よりなる事侍る
由歟ようひよ侍ると猶俊成卿を来ル持

左持
やまもろや
もろの山風よわるよの霜に木葉うつろひ
右　　四番
うつろひ多き竹ふかき松もあり霜にも霜よたゆむとてや
左古夏よたゆむとてや
よて無紅持よて侍るよし
四番
左勝
多き竹ふかき松もあり霜にも霜よたゆむとてや
右　　治部卿宗綱卿
高倉

神無月多つ田丸山の谷陰ゆふて霜や雪ら曇
左哥大方よ哥のさま
三国山乃山嶋ふて空よ
を高内つ藤原朝ト
五番
左勝
左中將忠定朝臣
散まそよ山の木葉を深
右　　前丹後守範宗朝臣
さく霜のまの秋の色のふ
左古ふも紅葉多く侍ふよ左

勾欄頭笑え 行曲廊下ゟ 行ゟ 勝ゟ 宮ゟ 行ゟ 文

六番

左

山ゟ ゟ ゟ 木 守 事 ゟ 霜 ゟ 下 ゟ 為 ゟ 文

右勝

春残 れ 山 ゟ 雪 ゟ 雪 ゟ 為 ゟ 侍 ゟ 為 ゟ 文

世 ゟ ひ ゟ 行 ゟ 侍 ゟ 面 又 為 ゟ 侍 ゟ 為 ゟ 為

つ ゟ 行 白 ゟ れ ゟ 為 ゟ 行 ゟ 普 ゟ 柳 幸 ゟ 為 ゟ の

ゟ 為 ゟ 由 ゟ て 勝 ゟ 為 ゟ 侍 ゟ 為 ゟ 文

右大臣

右兵衛督雅通朝臣

七番

左勝

春の根もうつろひぬる冬ごもり

右

泊瀬山 ゟ の人 ゟ 瀧 ゟ 更 ゟ

両首優ゟ 侍 ゟ 由 ゟ

初霜 ゟ 降 ゟ ゟ の霜乃名ゟ 読 ゟ ゟ

うつろふも久しき行末 ゟ 積 ゟ ゟ 定 ゟ 行 ゟ

左下句優ゟ ゟ ゟ 侍 ゟ ゟ 文

権大納言信実

中務

八番

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

左持　　兵衛尉内侍

うめそでして木の葉ふる山もとのさひしき冬の朝ぼらけ　忠信卿

右　　左馬権頭

昆明池の山ふかき紀歌そでに雫のかゝるかと思ふ　其経

小雪ふりて嵐の老木もとにおとろく鹿の声　仲国

ちらぬ間の花をやさしと思ふらん　持

九番　冬野霰

左勝

御製

むさし野はさえ行く雲の埋みて霰ふる夜の月ぞ冷まじ　家隆卿

右

やをらおる霰をきゝつゝ山ふかみ雪と思ふに夜ぞ更にける　太

左義賢文章相兼て能書の聞え有ければ

太等矢田野の陣営を廻る人馬面白きを作りをきて

待つるまてあつち山あらし同き多作りとして　海次左馬勝

十番

左勝

通光卿

木枯のそらにそそる笛竹の枝よあら〳〵我も
右　俊成卿女
如何ぞ此あらそひ歟の袖よりもそそるは笛の枝
方無其難有哉
よハ竹〳〵枝と秋の野よりそそる神よりやうん
事うるはしや人〳〵
右勝
十一番
方　實氏卿
霜もよしあらそふ夜半の笛竹の
右　範宗朝臣

露ならぬ秋野の気色白玉ハ尾よりそそる笛の枝
方右宜由未を得よ〳〵侍〳〵我も〳〵と云ん
事あるべきや況て霜の野と云
右勝
十二番
方　實泰卿
あら〳〵笛竹の枝よりそそる霜の野〳〵の笛の音
右　高倉
あら〳〵野もせの花をちる〳〵と吹尾よ霜もおよ〳〵雲の落ゆく
右いとおもしろく侍を方〳〵勝負を定られ

作り文

十三番

左持　　忠宗朝臣

桂野なる菓木ある山尾よ菓ある雪ふり重る

右　　為家朝臣

花よそ文桂野の菓ゝ袂よもる分ゝ雪ゝな

左すゝ折よたるあゝ作りゝを右の菓ゝ袂よ雪ふりかゝるそといふ

弾正尹久持と定ル

十三番

左持　　雅経朝臣

うき野や宿ゝ衣きすたゝ

右　　右大臣

如是つゝも志めくとうゝ桂弓未ゝ雪ゝよ雪ふりかゝ

宿ゝ衣きすたゝよ云ふをたる哥の

そくとあるよゝくりすゝたるそ比自体

ゆゝく作りまと志給ハゝ雅経朝臣ト侍由ト

侍ゝよ右ゝそくとうゝ作ゝんと多ゝて菊持

十番

左持

信實

吹とめぬ風もよこ野のさよ降や霰ふりてもてるひ

右

風よする野べの玉ざさうちなびきさやひいくくと降霰かな

作よみやあるや

又

ふりて又為持

十六番

左持

おのおく来野辺の霜もまたきぬの色に霰をまとはせ

古

忠信卿

兵衛内侍

志ゐて一野の霰の玉ざさうちなびきさやひいくくと降霰かな

左の方の心ゆるしの色にと空作る由ありて名のそらく

袖て水もあるやうにや侍らんと優類朝臣左右くいひあらそふ

こともとゝまらざりければ第五句をもとゝ

季作るよりは古作左持ぞさもあるべき

為勝

十七番　左勝　冬関月

風もゆるむ玉ぼこよりや夜のさ衣

御製

右

衛門尉藤原氏隆卿

十八番

左勝

神祇伯源朝臣通光

右

修理権大夫藤原朝臣俊成卿女

十九番

左持

皇太后宮大夫藤原朝臣俊成

右

前中納言藤原朝臣定家

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

よて為持

廿番

左持

ふもとやまうく秋ふかき

右

降つもる雪をさかう〳〵照

右なれ今夜殊うく白川の夜いほの景色

侍るうへよ方の上句頗るおもしろくて

きこゆ〳〵や侍〳〵ん又いつくれ実ともゆかし

仍両頭より侍ると雖も猶左勝負を定れ

侍ると雖も猶左勝負を定れ

廿一番

左持

あけぼのやうく白妙の雪ふりつもる

右

逢坂やうく関の戸ささぬ朝より

知家朝臣

左文字優よ無難由各々ゝ通ひ歌の葉

のはもをゝしくもあるかな同じ枝の事ゝ

侍れハ為持

廿二番

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

方持
清見うら風うち寄する冬の浪
右

雅経朝臣
月影のあかしをきそふ袖の涙
いけるひじ持ち定めぬ秋の夜
廿三番
方勝

信實
須磨のうら秋をうつせる雲井より
右

康光
あかつきの夢ぢも絶えて唐衣
うつ手の須磨にて月影うつる木枕の風

秋をうつせる雲井より
て方勝

廿四番
方持

兵衛内侍
須磨の浦霜夜の月を友千鳥
右

忠信卿
風さゆる実のうらやれ袖の
方ハ千鳥なくなくして
みぬめなくして為持
廿五番 冬川風

為持

左持

山のはのそらもうれ弥もる風の志るこそ

右

御製

高川水もた久波の志るしなる風のまそ

雨蔭木の葉のそらもる弥もる風の志るこそ

家隆卿

女六番

左持

云ひてたるよ弥ふかきまく侍る由よて各勝

宮内卿

通光卿

みわと川霜吹おろす山おろし

右

そ眼ゆの秋もる文庫の霜そらるそ花の川風

俊成卿女

女七番

左持

霞ゆふこそ志ら糸の春の川風

寂氏卿

右

範宗朝臣

春毎る花氏松風する山川そ花と浪の色そ弥る

左の更そ高そ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

廿八番

左持

山風の岩波吹古すをとは川うつる紅葉なれ

右

高倉

山川のもみちも水のあやなれや風のちらすみ

宮定家卿

宮廿五番同じ心を侍ればいと宣ふ

〜をおよそ〜るまゝ再びたゝかふ人侍

持よりなを侍ふ

廿九番

左持

水鳥のあとやする高河浪深のあけ暮のまゝ

忠宅朝臣

右

浪のよる〳〵水鳥の鴨のうき寝する

家朝臣

左水鳥の音羽もとゞろめ浪うめ埋せるんつる

あしてうき寝を右なれ川を水鳥之同心侍ふ

をよく〳〵持とぞ

卅番

左勝

雅経朝臣

あすもこゝに逢坂の関もる雲も夕の郷よ夜もすがら
　　右大臣
かり野川きの行くうちは山風よりもあらし也けり
　　右のきよ紀河内もそは侍をて左
夜もすがら猶旦行曲各ゝ為勝
　　次一番
　　方　　信實
川の影よ紅葉をそふあひ風のふきもあへぬ名ぬ
　　右勝
吹風よそれや遠く動むむ川瀬の浪のをそうす〻契
　　康光

追風をそふ〻風のよ〻まそ〻侍そ〻右下
白像よ侍をの可勝曲をや
　　次二番
　　方　　善衛門侍
月すあいむすゝ動もまそ〻瀧のをそれ河風そ〻吹
　　右勝　　忠信卿
雨そ〻川のそ〻流そ〻水鳥よそのう羽風も寒そ〻渡
方をそれる事れ〻そ〻右本要の祠
三句よなそ〻侍行そ〻
と定それ侍そ〻

廿三番　冬海雪

左　御製

ふきむすふ日すもいてくる雪よりも人やはわすれぬその浦萩

右勝　家隆卿

和田の原八十嶋もろく隆雪乃あ雨きる浪よりも尚毋人やはわすれぬ浦萩風雪氏家兼朝

乞妖艶もろく跡つけて待るを尚毋あまきる

浪よりひてもこの糸牛嶋向き晩ゟ秀雪

妖姿又人もろもせてふもろ待る面ゟ待ゝを

右よ可勝由天意侍ゝ

廿四番

左持　家隆卿

あら衣ゝも吹ゝ尽志ほ風よなゝてさゆる雪氏志ゝ浪

右　俊成ゝ女

ふそゝゝる花の雪よう志の海氏ゝも浪乃雪の塩風

朝ゟ夕ゝふうゝ文志る雨ゟ衣ゝ毛ゆゝた免し

あゝゝゝゝやゝゝ人待ゝ志ゝ花の雪ゝ志ゝの海

うゝゝも浪ゝてゝゝ雨ゝゝゝひゝゝ待ゝのゝゝ

ゝゝゝゝ人ゝゝゝ侍ゝ花ゝゝゝ

廿五番

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

左　　實氏卿

雪つもる沖津島根の小松原
　　右勝　　範宗朝臣
あらそひとなく〳〵も雪ふかきのこりて
左もゝる籠もかくれなく〳〵も
　　右優なりとや人〳〵
　　く為勝

廿六番

左　　定家卿

住吉の浪のうつろふ松の雪
　　右勝　　高倉

廿七番

左　持　　忠定朝臣

浪ふかくよもむつまじく雪積つゝ
　　右　　知家朝臣
あまをぶねこぎもとをれず春霞
浪のうへよも雪ふかき風情哉

題よ詠そゑる初の時文そへん宣時も持て完ナ

世八番

左 持 雅経朝臣

里うくあまれそまやの松もそ深の白雪

右 太夫尉

海原や鶴もる沖ふる雪もあまる衣うちつゝよらむ

左 勝 康光

たれとかきまき深の白雪いひしらて冥ふこそ侘

きてとうる原や鶴もる沖ふまゝ待る白雪

無勝負

世九番

左 持 信實

きまれあまの苫ふきて埋む富士の根の雪も初ふよ冬籠

右 康光

海よれ承雪ゆきまる浦風よもの松ふくらや吉えまきうん

左右共よ優なる由ゆて又為持

四十番

左 勝 兵衛内侍

おとうく都そもれし難波のあしの雪のあけ

右 忠信ナ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

をしかのこえたきのいとうん松蔦やいう〳〵ら山の雲れ下お初後
雑波のあしれ雪乃下おれ行いと空きまく侍う由
一同うて為勝

四十一番　冬々猛
方　持　御製
如行き侍うう〳〵文山の夕を雨未の白雲
右　氛隆々
内そ〳〵ふやも中山あり〳〵よおまこう冬れおもよそ〳〵
如行文つう〳〵ら〳〵死山れ夕を雨の雲めうある
人うきうれ〳〵おうを生う〳〵侍由満産ヶ行〳〵とお乱

うう冬のおくもまそ〳〵〳〵雑勝う由天意侍うて右
れ脇と役行〳〵を宮角つ忠切よ持う由を〳〵

四十二番
方　持　通光々
乗ち人の思行おとたのむ雪うあ
右　俊成々女
もう句やもう新うる名うおとふ旅のうう〳〵うる七
方ちきう〳〵雪おほう〳〵うるよ〳〵人うて右まて
なる木一おとて為持

四十三番

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

左勝　　實氏卿

歸るさもうらみもそよし小夜衣
　　袖にまがふな山の端の月

右　　範宗朝臣

おもひたえたの心山の端の月
　　袖にまがふな袂なる雁

うたてこそ可勝由宣下

廿十三番

左勝　　宣方卿

引もすよ夢もうつゝも夜の衣
　　うつゝ夢とも分ぬ面影

右　　高倉

柴の庵は山をつゝみて雪ふかし
　　音ふりくらす谷のかけ道

持之番

左　　忠宣朝臣

降つゝ山路はくらし雪ふかし
　　夕日のうすく遠のしら雲

右勝　　紀氏朝臣

冬ふかき日のゆくもあはれ久堅の
　　微陽うすき窓の雛鶯

持之番

左　　忠宣朝臣

降つゝ山路はくらし雪ふかし
　　夕日のうすく遠のしら雲

右勝　　紀氏朝臣

冬ふかき日のゆくもあはれ久堅の
　　微陽うすき窓の雛鶯

持之番

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

左　雅経朝臣

晴ときく朝ぼらけやみよしのの山のかすみも春風ぞふく

右勝　右大臣

久堅の雪けれ雲を吹風のめぐみもいろくさやかなる中山

吹風の色こそ見えね方松原やがてかすみぬ春の夜の月

勝と申す

早七番

左持　信実

打ちなびく春来る山のあなたより幾夜かすみて花の匂ひ

右

康光

今日もまたくるとはいはじ道芝もなべて葉のうへの露

猶も松も春籠りて為持

早八番

左勝　兵衛内侍

ひさしかるべき雪まより山の奥の冬待ちえてや春は来ぬらん

右　忠信卿

第松志のの衣の冬ごもりいつなる色をとふ人もなし

今日までも待てとぞ思ふ優曇華の花咲く春の夜半の月

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

四十九番　冬夜恋

左　勝　　御製

冬ながらあくるもつらしひとりのみ
待人の庭の木の葉も夜半の霜

右　　氏隆卿

右夜半庭の木葉もとあるは
左冬ながらつらく人のまつ
深夜冬ながらとは待を一同
五十番

左　持　　通光公

消ゆる霜の衣をうつしても見るよの
太

俊成卿女

忘れじと契し夏もたなばたの
両首ともに優に侍由各〻一首為持
五十一番

左　　實氏卿

月も桂もおなじ人めの多きものを
右　勝　　龍宮

ひとりのみやふけん月ともよるく雲
左もすこし優に侍るを太月も
よるく霜の

第拾弐番

左勝

雪もよに鐘乃をとをうちまして寒夜の高倉

右

あさ夜よ衣うつ砧ひゞきつゝ鐘の音さへ物むもよう事ぞそひ

行あめも雪もよ寒きうつ〳〵よ侍ん太詞哉

義顕

五十三番

左勝

忠定朝臣

ぬるゝ袖ねる水のうす氷

右

知家朝臣

中〳〵まゝ夜半の砧板の戸をとゝもすくる雨ぞあはれ

こゝろ哉更りもの侍る袖をく水の

ぬるゝたもとの為勝

五十四番

左勝

雅経朝臣

涙く袖の氷をうちはらひ夜半に契ふむすひ松

右

右太臣

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

まゝ□□□

歌合　建保七年二月十一日　當座和歌

題

春風　春雨

春野　春山

春恋　春月

作者　春雪

左　春水

御製

右近權中將藤原朝臣俊

右　左近權中將藤原朝臣爲家

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

大膳亮藤原範綱
宮内卿藤原光経
左衛門權佐尉藤原康光
講師
讀師
判者
一番　春風
左勝　女房　順徳院
やたの野辺の雪の夕暮
右　光経
朝日さす山の白雪消ぬめり霞よりなる梅の花かな

二番
左持　為氏朝臣
花の香をおのが匂ひと思ふらし梅咲く木の梅花かな
右
大かたの春もわすれぬ袖の香に軒ばの梅ぞ形見なりける
三番
左　伊平朝臣
青柳の糸もとめぬ春風に乱れぬ霞朝ぼらけかな
右勝　範綱
霞つゝ吹くもあやなし春風のおもひおきてや梅の花

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

四番　春雨

左勝

池水も汀の柳雫ちて

右

賀久〻〻末も白妙もゆふ山の色

五番

左

を引て四方の末もめも春雨よりもしてをわくん人ぞ待櫻も花の下陰

女房

浪よもつ〻春乃も〻

光経

為家朝臣

青柳の糸

康光

六番

左勝

山陰やつま木こり殘るあい雪もとけそめぬる春の景色

右

範綱

深山〻乃末のめも今〻春雨よりもそうそ野〻の若菜

七番　春屋

持

春ふかき霞のよそか久堅の月のうつろふも色うつろふ

女房

右

光経

霞きてそらく人やなく花咲ぬ杉木立松の春の景色

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

八番

左　持

松風も霞よむもる高根よりわたるも春の夜の月

右　　康光

番ひもあるおろもや杉むもの夜の霞る月よ雨上物技

九番

左　持

志賀ふもれ昭雨煙消ぬまとまる雲いおろの浪の上春

右　　範綱

武蔵野やかむもる末の山ぬまよ藤うすもる春の月新

十番　春雪

左勝　　女房

春日野の若草毛志ろくみる雪ふ雲の袂ふ白ふ日の影

右　　光経

雪降ぬる山や裏ふ志ろ花外ふ吹ぬ風ふ匂ふ春の夜の月

十一番

左勝　　為氛朝臣

春日野やうみふ雪もみうふ袖白ぬよ若菜ふ摘ふ

右　　康光

降ぬる花ふうふ身るうふを礼小松ふ承よ昭もるあも雪

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

十二番
左 持
百千鳥さへづる春のあけぼの霞わたれる峯の松風　伊平朝臣
右
美濃山も我こそ越えめ白妙の雪踏みわけて鶯ぞなく　範綱
十三番 春野
左 勝
あさみどりまだ霜しろき野べよりやあくるともなく霞たつらむ　女房
右
あをやぎのいとよりかけて春雨の露をも玉と貫く柳か　光経
あをやぎのまだ鳴なりもせぬ野べの霞のうちに書やあやまる

十四番
左 勝
来ぬ人を野べのみどりに立雁は行衛もうすき春の空かな　前家朝臣
右
草枕ゆふべもさぞな春の日のながめてくらす武蔵野の原　康光
十五番
左 勝
をく霜のいく重うすくなりぬらむ野べの緑よ春ぞしるき　伊平朝臣
右
いつしかと花の雪散る春の日の霞の衣ぬぐ人の春風　範綱

十六番　春山

左　勝　女房

白雲や花ようようう学櫻てたうえうう花乃山

右　範綱

花ゆえや遠うう霞む山のもう月もう更ゆく春乃白雲

十七番

左　為家朝臣

時うう知雪間もうすむ富士乃山煙や春乃遠ようもう

右　勝　光経

吉野山うう入たう乃ち峯乃白雲

十八番

左　仲平朝臣

うう野乃山乃白雲うう花よりもうる裏てうう

右　勝　康光

櫻うく春乃山人もまそもう花よりもやあくうもう

十九番　春水

左　勝　女房

春乃田乃苗代水よせうう谷乃小河乃雪なうう

右　範綱

谷川乃岩乃氷うとけて下り水ようもうろよ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

二十番
左勝
為家朝臣
きよ河のよ小田の苗代いとくらし行方も見ぬ山田の水
右
光経
すみよしのおきつかとよりよる忘水もるもくさ〳〵の妻恋のそら
二十一番
左
信平朝臣
妻恋よ芦辺の雁よ雲ゐまで鳴とも聞ん友なしの声
右勝
康光
やちよ迄残さもしく文字代の始とていそひそむる春の若水

二十二番　春里
左勝
女房
山ふかの花ゆへ志らぬ雪ならば春の井てゝも里人
右
範忠
ひさかたの雪と花とや吉野の山乃春ゆへ物うかるらん
二十三番
左勝
為家朝臣
春きても雪きえ雲のさむき嶺や大原のさと
右
光経
もゆる焼うつみやおもん霞棚引くあしたやの里

二十四番
左 持
伊平朝臣
ふしもなく焼あまもいとまあらし春の日そ
右
康光
見もせぬあまの煙寺かすみ霞めるもや浦の里
二十五番 春恋
左 勝
女房
いはき山なる思のそらもとも霞もるへき人もなし
右
範綱
夕されは軒端の梅も移香よ春や昔の人の袖
二十六番
左 勝
為家朝臣
もる程も妻のつま夜をまつ外は程なつ
右
光経
春の日のおそく笑てやもりぬらん花の枯すも色は残るあり雪
二十七番
右 勝
伊平朝臣
我そのもとも人の答あり外の妻もあり雪
右
康光
とまりくるある比のまの思の煙なるらん

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

二十八番　春祝

左　勝　　女房

神風やあまてるまでも春の日よ

右

範綱

おうぶの日より千とせの子と今年より春ふかくもる君の恵代る

二十九番

左持　　為家朝臣

雲うすき春の朝日もさしそへて三笠の山ぞ霞の衣

右

光経

君が見む常盤堅盤の色かうる松と竹とを代々の春

三十番

左持　　伊平朝臣

色ふかき松の陰よりも君が千とせの影ぞ嬉しき

右

藤原光

幾度か折てかざしつきるまで紀雲井の雲も春の初花

右建保七年二月十一日歌合以古写一本校合

題

深山春

夕帰鳥

暁更恋

被知恋

作者

左

御制

水郷秋

左近衛權中將藤原朝臣伊平

朝野康

右

右近衛權中將藤原朝臣為家

中宮亮藤原朝臣範宗

左衛門佐藤原朝臣経

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

左衛門少尉藤原康光　大膳亮藤原範綱

講師

讀師

判者

一番　深山春

左勝

如意房

奥山の岩根の櫻いろ〳〵に人もあまねき花やちるらん

右

範家朝臣

白雲のおもてもそむる山櫻ちるもの代ともひとめやは

二番

左勝

為家朝臣

降つもる松の白雲掃きえて深山の春ぞ遠ざかりゆく

右

康光

春やとく消ゆる雪間の奥山の岩根の櫻咲きぞ初めぬる

三番

左勝

伊平朝臣

白雲の消ゆる吉野山ならで何れの峯か春を知るべき

右

範綱

春ぞとも知らぬ深山の雪の中に花うき波の寄するなりけり

四番

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

左 持
源山くやうそ花の散ぬらん
右 吾嬬内侍
春雨そもろ〳〵日そう青柳の
五番 夕帰鳥
左 持
夕空霧霞そもろ〳〵よ引雲れ
右 女房
ゆふそらきりかすそもろ〳〵よひくもれ
六番

左 勝
帰雁そもろ〳〵の羽風もろ〳〵
右 為家朝臣
山ものうそゆふ雲よそもろ〳〵
七番
左 勝
山人も家路をいそく夕雲雀
右 伊平朝臣
遠さかる初音そ霞む春の日
八番

左

雲のよう氏松まつ〻ゝ夕へる見ゑ秋ようよ帰るゝ雁

右勝　　前参議行尹

夕ぐもよりつゝをきて雨の一九番　水鄉秋

左勝　　女房

山の端の月浪ぬるゝまで志ゝなるも秋ぬみちの

右　　前宗輔卿

風ぬるゝ宮古のそ昭ゑて程秋やゝ袖よ浪ゑるゝん

十番

左

今ゝよう扇ゑゝ文衆逸

右　　前宗輔卿

水のゑ氏川影ゑみ〻逸秋

十一番

左持　　為家朝臣

朝日山ゑ氏紅葉の逸ゝて濃ゑ秋ゑ風ゑ吹

右　　藤原廉光

富川衆の葉ゑゝゑ氏秋ゑ風ゑ吹ゑ

十二番

左　　伊平朝臣

花綵

浪よは月の影ゑ逸ゝよ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

左

龍田の秋の朝霧

右勝

秋霧のたゝまく多み龍田路の

十三番　朝野鹿

左持

通ふ野辺の萩の花妻

十四番

右

朝霧に雫も濡れて鳴く鹿の

女房

声聞くからに秋風ぞ吹く

範宗朝臣

朝霧よ雫も濡れて鳴く鹿の

無尽内侍

声を野辺に聞くにぞ秋の

光経

秋霧のたゝまく多み通ふ道

誰

左持

秋萩の咲ちるを待て朝霧の

為家朝臣

右

さ牡鹿の来鳴く音に籬の

廉光

十五番

左

朝霧のおくての小萩露ながら

伊平朝臣

右勝

玉梓の妻もこむ萩の朝露を

範綱

十六番

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

左

旅人のいる野も袖のあきを露ふかき鳴虫の声

右勝

朝ごとにあるらん野辺をしるべにて鳴虫の声

十七番　破知恵

左

志ら露もひやゝかさよ浦ふけて袖のあきを

右勝

をしなべて秋ふきまさる風前に雨ぞ残れる

十八番

左

いつもきんさよ中川岸くらよ流るゝ思ふ

右

ふくるとのそくしの夜の風ふけてをしまぬ人よもろもせよ

十九番

左持

思ひきやうき人よもとにけのまゝに萩原ふしてく

右

いひそめてこよ葉よそへ人もうき文共もうらみ思ひ

二十番

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

左持　兵衛内侍

世の人の涙もそふる袖よかゆやそまん

右　実

たちもまる我下そその夕燈人よきてあはのまてそ

二十一番　暁更恋

左持　女房

思ふともいてやへのあらむ我のそめすそふる月

右　経

暁の衣無夏の袖おとそそ

二十二番　範宗朝臣

左勝　為家朝臣

あふ事の猶うとそいふそ逢ぬ別あ衣

右　康光

物おもふ衣無夏の麻ようらうそ

二十三番　暁更恋

左持　伊平朝臣

袖ぬらすよりなる新もし別両衣

右　範綱

なかうまる夜明方鐘の音よむすひまそて無夏の両衣

二十四番

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

左

無位滕内侍

分まうくる紀面影の別ゝまゝ

右　滕　　光経

玉ゝの月をうき夜の形見まゝ

右一帖以寫本加一校畢

應永二十七年卯月日

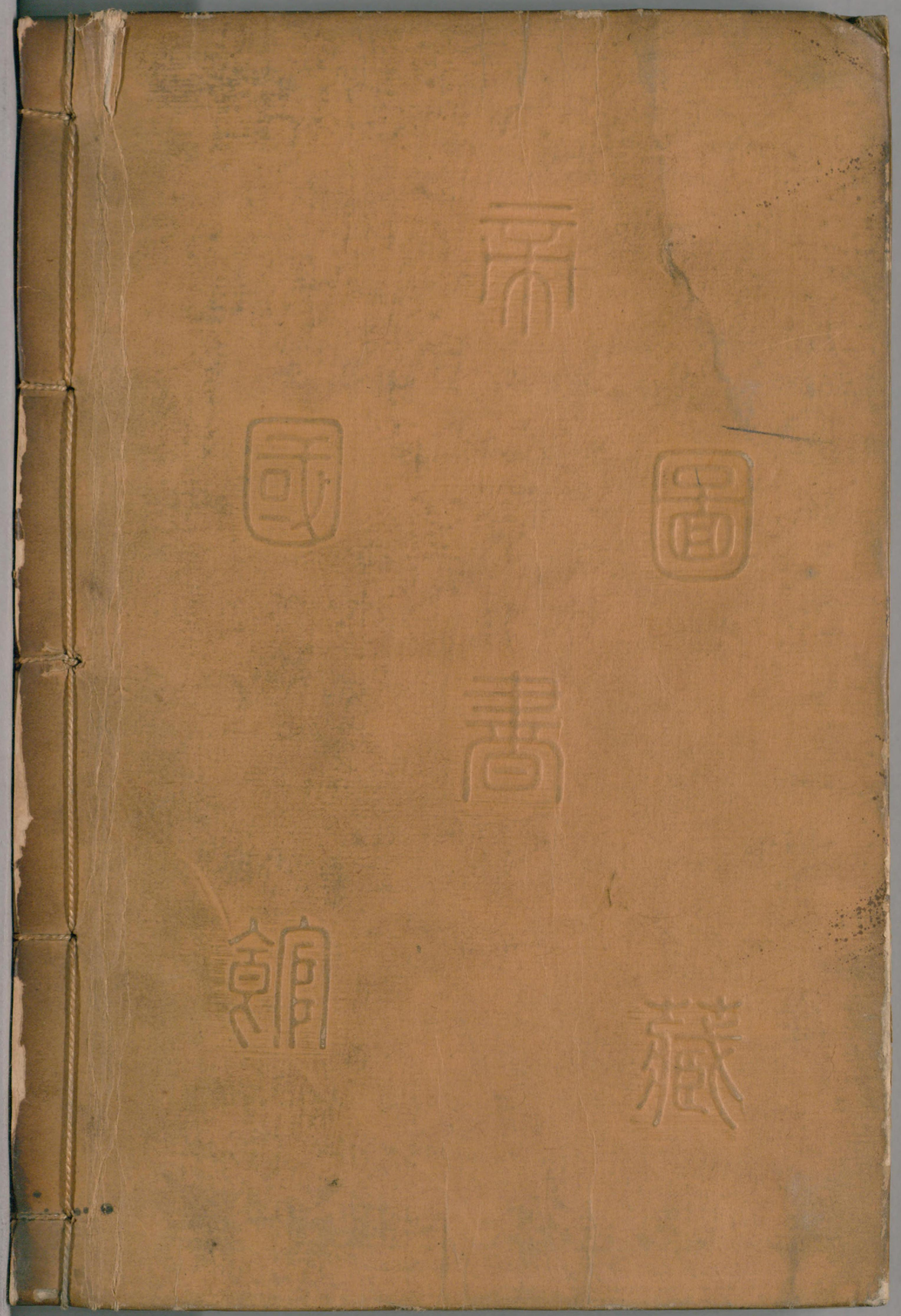
右建保七年二月十二日奇合以二本校合

羣書類從卷第百九十七

127
267
1

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用